大決壊!
おもらしな快感

～目次～

第壱話　誰にも言えない、気持ちいい秘密

第弐話　学校で我慢の果てに……セウト！

第参話　絶頂失禁は女の子の特権だよね！

第四話　スパッツでうんちおもらし！

第伍話　雨の中ならおもらししても大丈夫だよね！

第六話　授業中のおむつおもらし！

♥む　ふ　ふ♥

√２　学校で我慢の果てに……セウト！

（はぁ……、刺激のない毎日……）

　初夏の抜けるような青空に、たった一つだけ浮かんだ綿雲を見つけ、雫は憂鬱げなため息を漏らしてしまう。
　歩いているのはいつもの代わり映えのしない閑静な住宅街を抜けていく通学路。
　学校までは歩いて大体２０分くらいかかる。

（おもらしショーツ穿いてるのに、最近全然熱くなれない……。慣れって怖い。あたし、変態なのかな）

　最初のころはおもらしショーツを穿いているとバレたらどうしよう、どうなってしまうんだろうとドキドキして、色々と妄想してしまって、教室につくころにはショーツをぐしょ濡れのヌルヌルにさせていたものだ。
　だけどいまではそういうことは無くなった。

（あのころの純粋だったころのあたしに戻りたい……）

　それを言ったら、おねしょしたショーツを穿いて登校しようだなんて思いつく時点で純粋じゃないし。
　むしろ変態だし。
　しかも今となっては、いつもおもらしショーツを穿いて登校してきている。
　ちゃんと匂いがしないように消臭スプレーを持ち歩いているし、スカートのお尻に染みができていないか、しっかり注意しながら。

（もう、すっかり慣れちゃったなぁ）

　いつもおもらしショーツがおまたに食い込んできていると、だんだんとその刺激に慣れてきてしまって、なんというか、刺激が足りないような気がしてくる。

（そうだ）

　いつもの通学路をぼんやりと登校しながら、雫はハッと閃く。
　思わず立ち止まりそうになるけど、そこは我慢して。
　しかし脳内ではすでに次なるエッチなことを妄想している。
　それは……。

（学校でおもらし……してみる？　でも、そんなことしたら気づかれちゃうかもしれないし……！）

　歩きながら、頬が熱くなるのを感じる。
　こうなってしまうと火がついた女体は収まってはくれない。

（やだ。なんでドキドキしてるの？）

　学校でおもらしするところを想像しただけで、トクン、胸が高鳴って、落ち着いてきたはずの秘筋がじゅわりと熱くなってくる。

（ぱんつのなか、熱くなってきてる）

　そんなことを考えながら、いつものように校門をくぐって昇降口で上履きに履きかえる。
　ショーツが見えないように、しっかりと気を遣いながら。

☆

（うぅ〜、おまた、むらむらする）

雫が人知れず眉をしかめてしまったのは昼休みの教室でのことだった。
ちょっとお行儀が悪いけど、本を読みながら購買部で買ってきた菓子パンを無心に咀嚼する。
だけどいつもならすぐに読書に集中できるはずなのに、雫の意識はぱんつにばかり集中していた。

（もぅ、クロッチ……お尻までヌルヌルだよ……）

もぞもぞと、やや肉の乗りすぎた太ももを擦り合わせる。
するとクロッチの裏側に、ネバッとした糸が張る、気持ち悪い感触がした。
一度昂ぶった女体は、どんなに平静を装おうとしても、ショーツを淫靡な汁で汚してしまう。

（エッチなこと、頭から離れないし！）

諸悪の根源は、朝にふと思いついてしまったアイディア。
学校でおもらしをしたら、どうなってしまうのだろう？
どんなに気持ちいいことだろう？
そのことがずっと頭から離れずに昼休みになり、いまや雫のショーツはおもらしをしたかのように愛液でヌルヌルになっていた。

「ふぅ」

雫は誰にも悟られない小さな、しかし熱い吐息を漏らすと、パタンと文庫本を閉じる。
そしてヌルとしたショーツに顔をしかめながらも立ち上がると、トイレへと向かうのだった。

☆

「うわぁ。ぱんつの裏側、発酵してるし」

女子トイレの個室でショーツを降ろす。
すると露わになったクロッチの裏側は、愛液や少女の汚れで茶色く発酵していた。
それは栗きんとんの残りかすによく似ていた。

モワァ……。

ショーツのなかから立ち昇ってきたのは、おしっこと汗、そして少女の匂いが混じり合った、チーズ系のすっぱい香り。
ゆうべから穿き続けてきたおねしょショーツは、いまにも力尽きそうになっていた。

「でも、まだクロッチの外側にまで染み出してきてないからセーフ……だよ……ね？」

そのクロッチも、何回もおもらし遊びをしてきたせいでかすかに黄ばんで毛玉ができているのだけど。
しかもムチッとした雫のお尻のせいでゴムが伸びている。

「おまた、拭いとこう……」

赤ん坊のようにつるんとしたパイパンは、蒸れ蒸れショーツのせいでかすかに赤らんでいた。
このままではかぶれて痒くなってしまうかもしれない。

「はぁ……」

ふきふき、ふきふき。
おしっこもしてないのにおまたを拭くのは、なんだか虚しくて負けたような気になる。
というかおまたが気になりすぎておしっこをし忘れていた。

「むむむ。せっかく拭いたのに、ここでおしっこをするのは本格的に負けた気がする……」

男の子はちんちんがあるからおしっこをしても拭かなくてもいいらしいけど、女の子はワレメからおしっこが出てくるのだ。
だからおしっこをしたらしっかりと拭いてあげないといけない。

「おしっこを……、するべきか、せざるべきか」

１時間前の休み時間に用を足していたので、そこまで尿意を感じているというわけではない。
これならあと２時限……放課後まで大丈夫だろう。

「おしっこ、我慢しちゃう？　してみちゃおうか？」

クロッチを見つめながら、雫は呟く。
ティッシュで拭っている股間がほんの少し熱くなる。

（もしも学校でおもらししたら、どんなに気持ちいいだろう）

キュン！
無毛の縦筋が痙攣し、ピンクの肉のフードを脱いだ肉芽が固く勃起している。

（とりあえず、おしっこは我慢しておいて……。それで、まだ漏らすって決めたわけじゃないしね）

心のなかでそんな言い訳をしながらも、雫はふぅ、熱い吐息を漏らす。

「男子はちんちんが勃起すればそれで済むらしいけど、女はおまたが濡れてきちゃうのがなー」

おかげで雫のショーツのなかはいつも湿度１００％だ。
雫は最後の仕上げにとトイレットペーパーを手に取ると、

「……ンッ」

ワレメの深いところまで指を食い込ませてしっかり拭く。
こびりついてくるのは、栗きんとんの残りかすのような汚れ。

「はぁ……。こういうときはちんちんっが欲しくなる……」

くにくに、くにくに。
何回か肉裂を優しく拭き拭き、往復させて綺麗にしておく。
だけどあんまり拭きすぎるとおまたがこすれて痛くなってしまうから、拭きすぎはよくない。

「おまた、綺麗になったけど……ぱんつは……」

クロッチの裏側には、発酵した女子汁がべっとりと貼り付いている。
拭けば、少しは綺麗になるだろうけど――。

「このまま、穿きたい。……無性に」

いつもおねしょショーツを穿いて登校してきている雫は、自らの汚辱されたショーツに興奮してしまっていた。
雫は洋式の便座から立ち上がると、

「……んっ！」

雫はショーツを穿くと、キュンッ、おまたが痺れて、お尻を後ろに突きだしてしまう。
クロッチに、クレヴァスの痙攣が浮き上がった。

☆

（おしっこ、しとくんだったぁぁぁぁぁ!!）

雫が心のなかで絶叫したのは６時限目の理科の授業中のことだった。
だけど後悔してももう遅い。
６時間目の授業はすでに始まって５分が経とうとしている。
教壇では白衣を引っかけた女性教諭が重力に関する説明をしているところだった。

まだ授業は始まったばかり。
このタイミングでトイレに行きたいだなんて言うのは、いくら雫の根底に変態性癖が染みついているとはいえ恥ずかしすぎる。

放課後まで、あと４５分――。

ジュワ……。
　ジュワワ……。

（あっ、駄目……）

おまたから滲み出す恥水に、クロッチの裏側が生温かくなる。
椅子に座ったままでおもらしをすると、縦筋から漏れ出してきたおしっこは会陰を伝ってお尻へと広がっていく。
放課後まで、４０分――。

（こ、これは……！　最初からクライマックスぅ……!!）

じゅもも……、
　じゅもももももっ。

キュン！　キュン！
おまたが痙攣して、そのたびにおしっこが漏れ出してくる。
もう、なりふり構っていられなかった。
放課後まで残り３５分――。

（まさか、授業中にこのフォーメーションをとることになろうとは……!!　あたしとしたことが！）

じゅもももももっ。

むぎゅっ。
雫は机の下に左手を忍ばせると、あろうことか授業中だというのに股間を前抑えする。

教壇に立ってる教師からは生徒がこそこそと隠れてスマホをいじっているのが丸見えだったりするらしいが……、いまはそんなことを気にしている場合じゃない。
ここで漏らしたが最後、雫の学園生活が終了する。
あと３０分――。

（も、持ち直したか……!?）

前抑えしながら、恥水を溜め込んだ膀胱という名のダムの貯水率を探る。……前抑えしている両手で。

（セ、セーフ……！　まだだ、まだ終わらんよ……！）

前抑えしたおかげで、どうやらすぐそこにある危機は去ったようだ。
しかしこれは一時しのぎでしかない。

膀胱に溜まった恥水を放流しなければ、こうしている瞬間にも一滴一滴、おしっこは膀胱に濾過されているのだ。
そのことは雫が一番よく理解している。
放課後まで、あと２５分――。

（そうそう簡単に漏れるものではない……！）

じゅわわっ、
　じょぼぼぼっ。

「ぁっ、ぁぁっ」

スカートの上から前抑えしていても感じる、滲みだしてくる生温かい恥水。
早くも、前抑えでも凌ぎきれなくなっている。
あと２０分――。

（で、でも……。まだ諦めたわけでは……っ）

じゅわわっ、
じゅわわわわっ。

ジワジワと、しかし確実におもらししながらも、雫はまだ諦めてはいなかった。
むしろ、濡れた股間は熱くヌメッていた。
１５分――。

（曰く、おしっこを限界まで我慢してから放出すると、その快感は男子の射精に近いものになると云う……！）

以前、射精に興味があって調べたときに得た知識。
つまりこの状況は、考えようによっては射精のお預けを受けている……焦らしプレイとも言える！
残り１０分……！

（溜まってる！　あたしの膀胱に！　ザーメンが！　なみなみと溜まっているぅぅ！）

決壊寸前の尿道がキュンキュンと痙攣し、もうこの左手を離したが最後、山吹色の波紋がオーバードライブするに違いなかった。
あと、５分……！

（燃え尽きるほどヒートぉぉぉぉぉ……!!）

じゅももっ、
　じゅわわわわっ！

（まだだ、まだ慌てる時間じゃない。左手は添えるだけ、左手は添えるだけ……！）

じゅわわっ、
　ジワワワワ……。

　この黄金の左手を股間から離した瞬間、大決壊してしまうことは間違いなかった。
　しかしゴールはもうすぐそこまできている。
　あと３分。
　１８０秒を乗り越えることができれば勝ちが確定するのだ。

（こ、こういうときは素数を数えて心を落ち着けるんだ……!!
１，３，５，７，１１……って、１って素数だったっけ!?）

　そんなことを考えながらも授業は締めに差しかかり、次の授業までの宿題コーナーになり――。
　――だが。

「あー、そうそう。ちょっとキリが悪いから、やっぱりもう少しだけ進めておくか」

　無情にも告げられる延長戦の宣言。
　理科の女性教諭は再び教科書を開くと、黒板にカツカツとチョークを走らせて公式を書いていく。

（ロ、ロスタイム……！）

　この瞬間、雫はこの世の終わりを目の当たりにしたかのような表情を浮かべていたに違いなかった。
　瞳孔が開き、過呼吸に陥りそうになる。
　全身の毛穴という毛穴から汗が噴き出してきて、意識が真っ白になる。

（み、見える……！　あたしにも……見えるぞ！　刻の涙が……見える！）

　しゅいいいい……。
　　しゅわわわわわわ……。

「も、もう……だめぇ……」

　左手から、フッと力が抜けると、ショーツのなかに取り返しのつかない温もりが広がっていく。
　クロッチの裏側におしっこが弾けて、パンパンに張っていた膀胱が楽になってしまい――

「次の授業では、この公式を使って問題を解いていくから、しっかりとノートにとっておくように。それでは今日はここまで！」

　女性教諭が言い終えるや否や。
　ガタッ！　雫は勢いよく席を立ち上がっていた。
　もはや前抑えをしていなければ、恐るべき尿圧を抑え込むことができなくなっている。
　だけどいまはそんなことを気にしている余裕さえもない。

「あっ、う！　うぅー！」

ジュワワ……。
しゅいいいいいい……

なんとか立ち上がるも、パンパンに張った膀胱のせいで背筋を伸ばして立つことができなくなっている。
それでも雫は他の生徒に前抑えしていると悟られないように、前屈みになって教室の机のあいだをすり抜けて、廊下に。

「も、もう我慢できない……!!」

じゅもももも！
ぷしゅっ、しゅわわわっ！

廊下に出ただけで気が抜けてしまったとでもいうのだろうか？
かなりの量をショーツのなかへと放ってしまう。
力尽きたクロッチからおしっこが滲み出してきて、太ももを伝い落ちていく感触。
フッと意識が遠のく。

「あぁ……。もう、ゴールしても、いいよね……？」

しゅわわわわ……。
しゅいいいいいいい……。

廊下に出ると、そこはすでに放課後のざわついたいつもの風景が流れていた。
そんななかショーツのなかにレモネードが弾け、楽になろうとしている。

ここで漏らしたが最後、教室でおもらししたときの比ではない。
少なくとも他のクラス……、更には学園中におもらししたことが知れ渡ってしまうことだろう。

「安(あん)〇先生……、バスケがしたいんです！」

じゅもももももももも……。

もはや、おもらししながら歩いているのか？
それとも歩きながら漏らしているのか雫にも分からなくなっている。
ただ、たしかに分かること。
それはここで諦めたが最後、試合終了で、更には人生終了のお知らせであることだ。
尊敬できる先生も言っていたではないか。

「諦めたら、そこで試合終了ですよ……っ」

ぽた……、ぽたた……。

リノリウムの廊下に、おしっこの足跡を残しながらも、雫はなんとか下校中の生徒たちの合間を縫って女子トイレへと辿り着くことができた。
ピンクのタイルは女子トイレの証。
いくつかの個室は使用中らしいけど、一番奥の個室のドアは開いている。
ここまでくれば、あともう一息だ。

「はっ、はうう！」

じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼ！

女子トイレに踏み込んだ瞬間、ほんのりと感じるアンモニア臭に身体が勝手に反応してしまったとでもいうのだろうか？
ごまかしようもない量を漏らしてしまう。

じゅわり……。

前抑えしているスカートから生温かい恥水が滲みだしてくると、ぽたぽたとトイレの石床へと落ちていく。

「あっ！　ひっ！　ひああ！」

しゅいいいいいいいいいいいい……。
しゅわわわわわわわわわわわ……。

もう前抑えをしていても漏れ出してきてしまう。
それにトイレに駆け込むためには鍵を閉めなくてはいけないのだ。
そのときに股間から片手を離さなくてはならない。
だけどもう片手とか両手とか言ってられる状況でもなかった。

「もう、我慢できない……！」

じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼ！
ぷっしゅいいいいいいいいいい！

おもらししながらも雫は個室へと駆け込むと扉を閉める。
それと同時に鍵を閉めれば、もうそこは雫と洋式トイレの二人だけの世界だ。

鍵を閉めた雫はスカートを翻すと、ドスンッ、大きな音を立ててトイレの便座に腰掛けた。
その直後。

プッシャアアアアアアアアアアアアアア！

「はぁ～～～～～～～～！」

雫は、至福のため息とともに、勢いよくおしっこを噴射していた。

「間に合ったぁぁぁぁぁぁ!!　でっ、出る！　おしっこ……、止まらな……！　あっ、ひん！」

プッシュウウウウウウウウウウウウウ！

短くも太い少女の尿道からおしっこが噴き出してくると、ふんわりとしたアンモニア臭が立ち昇ってくる。

ぽた、ぽたた……。

しかし凄まじいまでのおしっこの勢いとは裏腹に、水音はどこか控えめでくぐもっていて、しかも大きな水滴となってトイレの水面へと落ちている。
そう……。
雫は、ショーツを降ろすことさえもできずに、トイレで失禁してしまっていたのだ。

「ぱんつのなかっ、熱くて……！　おまたに弾けてきて……！　んっ、ふぁああ！」

ぷっしゃあ！
　ぷっしゃあああ！
ぷっしゃあああああああああ！

　我慢していたおしっこを一気に噴出した快楽に、おまたが痙攣し、そのたびにおしっこが信じられないほどの勢いで噴き出してくる。
　それは女子として、いままで味わったことのない開放感であり、快楽だった。

「で、出る……！　ふっ、ふぅぅぅ！　で、射精（で）……る!!」

ビュク！　ビュクク！
　じゅもももももっ、じゅももっ！

　おしっこに混じって、やや白濁した汁がショーツから滲み出してくる。
　失禁と同時に、雫はたしかに絶頂していた。
　股間から溢れ出してきているのは潮なのか？
　愛液なのか？
　それとも本気で逝ったときに溢れ出してくる本気汁なのか？
　それはショーツを穿いているから分からない。
　ただ、ショーツのなかでは快楽が渦巻き、弾けている。

「あっ、ぐっ、ぐぅ！」

　ガクンッ、ガクンッ！
　腰が勝手に前後にスライドするように暴れ回る。
　処女なのに、ザーメンを搾り取ろうと腰が痙攣しているのだ。

「おっ、おおぉっ！　お尻が、勝手に震えて……！　あっ！　ああっ！　ああん！」

ジョボボボボボボボボボ！
じゅもももももももももも！

痙攣しながらも、我慢に我慢を重ねていたおしっこが噴き出してきてはクロッチの裏側に弾ける。
もしもショーツを穿いていなければ、おしっこが目の前にある個室のドアに噴きつけられていたことだろう。

「おっ、おしっこぉ……！　気持ちいいのっ、止まらな……んっ、はぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ぷっっっっ！
しゃあああああああああ！

視界が真っ白になる。
女としての本能が、五感のすべてを子宮に総動員して痙攣し、クレヴァスから汁という汁を噴出していった。

「はぁ……っ、はぁ……っ、はぁぁ……！」

しゅいいいいいいいいいいい……。

すべての痙攣が収まったころ。
火照った頬を弛緩させた雫は、同じように緩みきった尿道から残尿を垂れ流しにしていた。
ショーツに染みこんだおしっこは、お尻を愛撫してくれる生温かい手のようでもある。

「す、凄かった……」

しゅわわわわわわわ……。

ピクンッ！　ピククッ！
残尿を漏らしながらも、桃色に染まった太ももが痙攣する。
太ももが痙攣しているということは、ショーツのなかのクレヴァスも、そして膣壁も痙攣しているということだ。

軟体生物のように、熱く蠢いている膣壁――。
その深奥から、ドロッとした白濁汁が溢れ出してくると、クロッチの裏側に溜まっていった。

「学校なのに……、こんなにエッチな子宮のムーブが……、止まらなくなってるよ……」

女の子は、１回だけでは我慢できない。
男は１発出せば満足できるけど、女の子は精液を吸い取らなくてはいけないから、絶頂が長く続くようにできているのだ。

「触りたい――」

呟きながら、ショーツのなかに手を入れかけ……、しかし思いとどまる。
ここは学校なのだ。
これ以上エッチなことをするわけにはいかない。
今日のところはここで我慢しておかなければ。

「はぁ……、はぁぁ……、す、凄かった……」

学校でおもらしするのって、こんなに気持ちよくてドキドキするものだなんて。
落ち着いてくると、サーッと、心地いいノイズが聞こえてくる。
絶頂したあとの、心地いいノイズ。
寄せては返す、波のような。

「学校でおもらしするのって、こんなに気持ちよかったんだ」

しゅいいいい……。

最後の一滴まで、快楽を堪能するかのように漏らし、はふう、至福の吐息を一つ。
それから更に５分くらいはぼんやりとしていたと思う。
熱かったショーツ……お尻の部分が冷たくなってきて、ふと現実に引き戻されたのだった。

「気持ちよかったぁ……」

雫は洋式の便座から立ち上がるとスカートの裾を正す。
ショーツを脱いだほうが良いのは分かっている。
だけどいまここでショーツを綺麗に洗って、おまたを綺麗に拭いたとしても家に帰るころにはショーツがヌルヌルになっているに違いない。

「クロッチ、まだ熱いや。イケナイこと、しちゃってるんだ」

クロッチの裏側に背徳的な熱を宿しながら、雫はトイレの個室をあとにする。
そして何食わぬ顔で何食わぬ顔で教室に戻るとカバンを回収して、いつものように下校風景へと溶け込んでいく。

（今日はショーツを汚しちゃった女子、他に何人いるのかなー）

　ふと、そんなことを考えてしまって、雫は下校中の他の女子たちのスカートの裾を気にしてしまう。

（――まさか、いるわけない、か）

　雫が一笑に伏したそのとき、初夏の風がいたずらっぽく内股をくすぐっていった。

体験版はここまでです！

ここまで読んでくれて

ありがとうございました！

～既刊案内～

電子書籍配信サイト　　で配信中！